

2015年度教師海外研修(エルサルバドル) 研修報告書

学校名	海星高等学校	氏名	吹田 沙織
-----	--------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

事前研修で、エルサルバドルには貧困、治安、環境問題などいくつもの課題があるが、ほとんど出回っている資料がなく、現状について知る術がなかった。私はネットや文献だけでは知ることができないエルサルバドルの情報を、実際に見て、現地の話聞き、体験して、「現地の”そのまま”を伝え、考えられる」教材収集と多くの方との交流による自分の価値観の開拓が今回の目的であった。治安上、制限があり、貧困地区など現状をすべて見ることはできなかったわけではないが、気になることが消化不良にはならないように努めた。また、子どもや先生、一般市民、教育省の職員など、現地のいろいろな立場、環境の方と話をすることができ、各立場から話を聞くことができた。現地の方だけでなく、現地で活躍している日本人からも日本人の視点で見えていることを教えてもらうことができた。参加した先生方と気づきの共有もできた。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1 「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

エルサルバドルの治安は世界でワースト2位だと聞いた。治安が悪い原因に貧困があり、仕事がなく、「職業が泥棒」として、収入はないが大事な家族を養うために犯罪をしていると聞いて、この国の見方が変わった。ギャングもいるのが事実だが、出会った人たちはみんな親切で、自分たちの国をよりよくしていきたいと前向きに物事を考えており、自分たちの置かれた状況を悲嘆せず、これから先に何ができるか、未来に向けて意識しているように感じた。限られた環境の中だからこそ、最大限に生かそうと考えるのかもしれない。訪問先では、人々と交流する機会も多く、もちろん言葉は通じず、通訳さんに頼る場面も多かったが、伝えたい気持ちと理解しようという思いがあれば、動作を含めてのやりとりで何とか伝え合うことができ、子どもから大人まで多くの生き生きとした笑顔に会い、こちらも自然と笑顔になれた。このつながったという楽しい気持ちを子どもたちにもぜひ、伝えていきたいと思った。

(2) 柱2 「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

日本とエルサルバドルは今年、国交 80 年を迎えた。しかし、日本ではエルサルバドルのことがほとんど知られていない。私もエルサルバドルという国自体を知らず、意識したこともなかった。実際に、現地に行き、話を聞いている中で、エルサルバドルは、自国で資金を稼ぐための資源も技術も乏しいことがわかった。日本も資源がない点は同じだが、技術を持ち、資源を輸入し、加工するなど技術力で発展してきた。その技術を活かして、エルサルバドルに空港や高速道路、港などを作ったり、多彩な人材を派遣し、知識や技術を伝え、日本はエルサルバドルという国の発展を支えている。その一方で、日本の戦後復興のために日本の紡績工場が進出した国、世界で2番目のトヨタ自動車販売代理店ができた国がエルサルバドルであるように、日本とエルサルバドルの関係は一方的ではなく、互いに支えあう関係であることがわかった。

(3) 柱3 「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

世界全体で起きている気候変動の影響は、エルサルバドルにも起きている。雨季にも関わらず、雨が少なく、農作物が枯れる被害が出たり、気候の変化でコーヒー農家ではロア病により、生産力が落ちている。これは中南米の他国でも、アフリカでも起きていることだった。生産国では品種改良や生産性を効率化し、対策を取り始めていた。そこへ私たちには何ができるかとぼんやり意識していた中で「需要の増加とは対照的に、コーヒー豆の収穫量は減少し、日本のある店舗で複数の銘柄が入手困難になっている」というニュースを帰国後に見た。自分とエルサルバドルの問題が直接、つながった瞬間だった。先のことではなく、今、起きている問題である。世界で起きていることは、たどれば私たちに関係してくる。共通の課題として取り組むためには、私たちの生活は世界とつながって成り立っていることを、自分たちの問題としてどれだけ多くの人たちに伝えられるかだと思った。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

多くのプロジェクトに出会い、大きな事業もすごいことだが、地域で支援している人の力に感心した。日本が支援を「してあげる」という形ではなく、現地の状況を把握し、いずれは現地の人が自分たちで課題を解決できるよう、手に届く範囲で現状を改善する工夫がされており、互いに支えあうサポート体制が良かった。また、活躍している青年海外協力隊や技術者は苦勞しながらも、相手国を尊重し、自分の活動に誇りを持って参加している姿が印象的で、こういう方々を派遣しているJICAが素敵だと思った。また、青年海外協力隊の活動を支えている調整員さんの存在も大きいと感じた。今後の視点としては、国への援助だけでなく、支援する側で働いているスタッフの中には、自分の活動に不安や課題を抱えている方もいたので、現地でよりよい支援ができるように派遣された青年海外協力隊がもっと国内外問わず、多くの分野の方と交流や情報を共有して、知見を広めながら活動できるとおもしろそうだなと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [SIT_7191]

◇キャプション： 私たちを警護中の警察官

◇解説文： エルサルバドルはギャング団の抗争や犯罪が多く、治安の悪さが課題だと各訪問先で言われた。私たちが無事に過ごせたのは、厳重警備のおかげである。治安が悪い要因に貧困がある。私たちにできることは何か考えたい。



●写真2… [SIT_7310]

◇キャプション：小学校での児童との交流

◇解説文：子どもたちとの交流プログラムで小学校へ。交流前に授業見学をしていると日本語で「日本のせんせいようこそ」とノートを見せてくれた少年。子どもたちも交流を楽しみにしてくれていたのだと知り、うれしくなった。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

私は、自分の学校（生徒や校舎、授業風景、運動会などの活動風景）や日本（四季が表れているもの、文化、食べ物、街並みなど）を紹介できる写真をスケッチブックに貼り、余白へスペイン語で説明を書いたものを用意した。言葉が話せなくても、子どもたちとの交流やホームステイ先でのやりとりで、とても役に立ち、相手も日本に関心を持ってくれた。また、世界地図と日本地図も使えた。

現地では、予定通りとはいかないこともある。「次の訪問地で…」がないかもしれないため、アンケートやインタビューなど積極的に教材集めをしたほうがいい。

一緒に行く先生方とは、昼夜を共にしていく中で、互いに学びあい、チームとしての絆を築くことができる。だからこそ、現地でも帰国してからも多様な視点で物事を見られるようになるので、多くのことを語り合う時間をとるといいと思う（バスの中や夕食後のくつろぎタイムで）。しかし、長旅なので無理はせず、自分の時間も確保する。

7. その他全般を通じての感想・意見など

教師海外研修は、個人の旅行ではなく同じ目的で多様な視点を持った者が仲間となって行くので、普段の教員生活では得られない体験、価値観を持つことができた。エルサルバドルはもちろんのこと他の中南米やそれ以外の国々のことにもアンテナを張ることができるようになった。今まで、海外にあまり関心のなかった自分が、ここまで世界に関心を持てるようになったのは、ただ見た、聞いたではなく、自分が直接、現地の人と関わりながら見て、聞いて、経験して、音やにおい、温度、空気というかその場の雰囲気も感じる事ができたからである。そして、それを仲間と共有し、噛み砕いて飲み込むことができたからだと思う。欲を言えば、もっと現地の空気に触れられるように街を歩いて、ゆっくりと自分の目で見て回りたかったとも思う。しかし、研修中も、地元のバスが襲撃されるなどいくつもの事件が起きており、私たちの安全を第一に配慮して頂いたため、無事に帰れたと感謝している。

以上